

クニマスの保全及び養殖技術に関する研究（クニマス資源の動向）

とりまとめ:小澤 諒

2010年に西湖で再発見されたクニマスの保護と活用を図るため、現在までクニマスの保全及び養殖技術に関する研究に取り組んでいる。ここではクニマス保全の基礎知見となる資源量を推定し、その動向を評価したので報告する。

結果の概要

2022年秋の推定資源尾数は5,479尾（1歳以上、寿命6歳とした場合）となり、過去最高値だった2021年から減少に転じたが、2012年以降5番目に高い値となった（図1）。2020年から資源量が増加傾向にあった理由については、クニマス1歳魚の生残が良かったことが考えられ、その要因として2018年、2019年の富士河口湖町の年間降水量が多かったため、産卵場付近の湧水量が増加するなど産卵環境が良好だったことなどが推察された。一方で、2020年の年間降水量は平年並みに戻ったことや、その他要因が複合的に影響し、2022年の資源量は、増加傾向から過去10年間のほぼ平均値に転じたものと推察された。

ただし2023年度の1人1時間当たりの平均釣果は上昇しており（図2）、資源量が再び増加に転じる可能性はあるものの、近縁種のアサギマスの資源変動が激しいことが予想されるため、今後も引き続き注視していく必要がある。

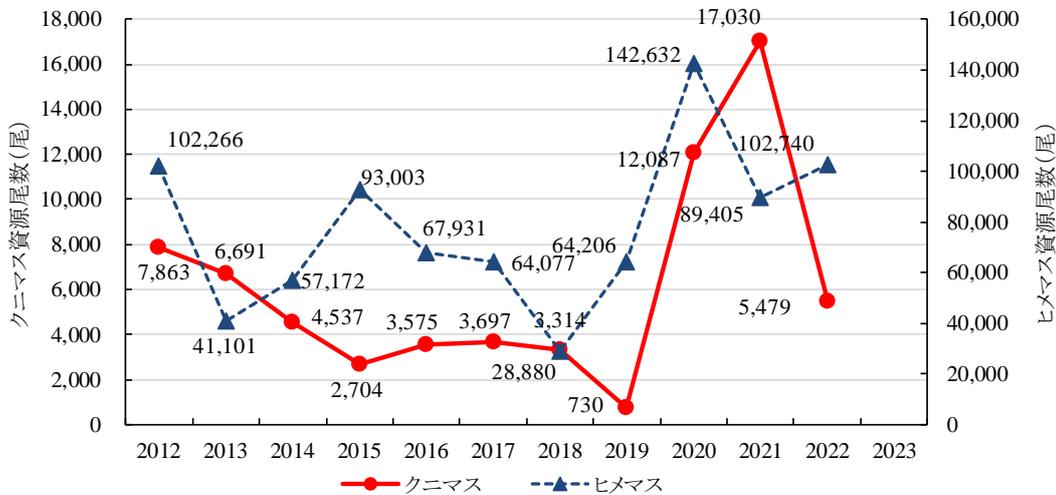


図1 西湖におけるクニマス及びヒメマスの推定資源尾数の変動（1歳以上、寿命6歳とした場合）

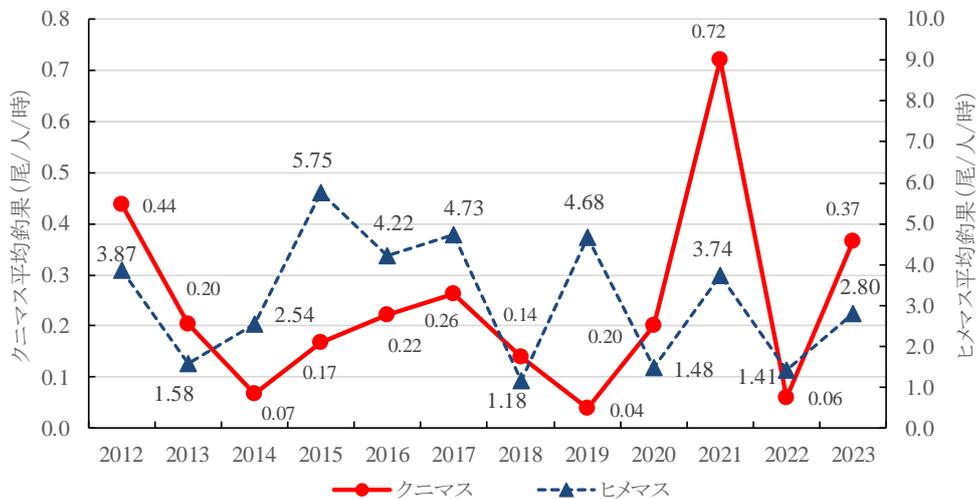


図2 試験採集時のクニマス及びヒメマスのCPUE（1人1時間当たりの平均釣果）